

はじめに

漱石 「ときどき、自分のふるいものを読みかえすと大変ためになるものだね。このあいだ、

何の気なしに読みかえして見て、だい分、読んで見たが、いま読むと、自分のいいところ、悪いところがはっきりわかるね。」

江口 「先生はどれが、一番いいとお思いました。」

漱石 「坊っちゃんなんか、一ばん気持よく読めたね。」

江口 渙かんの「漱石山房夜話」（『わが文学半生記』講談社文芸文庫）には、こんな一節があります。門下生として漱石山房（漱石が晩年の九年間を過ごした借家。東京都新宿区にあった）に出入りしていた江口の問いに、夏目漱石が答えたものです。

めったに自分の作品を読み返すことのなかったという漱石が、「一ばん気持よく読めた」と評した作品は、なんと『坊っちゃん』だったのです。『吾輩は猫である』から『こころ』や『明暗』に至るまで、世に傑作といわれる漱石作品は山ほどあります。そのなかで、著者自身が「一ばん気持よく読めた」と語る『坊っちゃん』とは、どんな魅力があるのでしょうか。

しかし、『坊っちゃん』を「気持よく読めた」と思うのは、もちろん漱石だけではありません

ん。それは、岩波文庫や新潮文庫などの累計発行部数を見ても分かります。多くの人が、長きにわたって読み継いできた名作であることを示しています。国民的小説ともいわれる所以です。

「ただ、『坊っちゃん』を正義感溢れる江戸っ子教師がくり広げる、勸善懲惡の痛快小説だと読むことは、一面的な読み方だと思っのです。たしかに、渾名あだなを駆使した登場人物の描写、江戸小話を思わせる会話のやり取り、活劇のような数々の事件、どれもこれも、漱石のユーモアのセンスと跳ねるような文体で笑わせてくれます。思わず快哉を叫びたくなる、楽しい小説です。

ところが、このユーモアと文体に紛れて見えにくくなっていることがあります。愛してくれない父母や対立ばかりの兄への思い。同僚である教師や愛すべき生徒との断絶。唯一の理解者「清」きよとの死別。そして、誰に対しても、本音と建て前を上手に使い分けられない坊っちゃんの性格。その「真っ直ぐな気性」が読者には決定的に痛快なのですが、だからこそ、人とのつながりが持てない孤独が、常に底を流れています。それはそのまま、漱石が抱えていた心の問題にもつながっているのだと思います。だから、実は、かなり難解で哀しい小説でもあるのです。

もしかしたら、この「楽しい」と「哀しい」の絶妙のバランスが、『坊っちゃん』を「一ばん気持ちよく読めた」物語にしているのかもしれない。

ただし、本書はこういった『坊っちゃん論』を語るものではありません。「楽しい」や「哀しい」の話題は随所に登場しますが、ここでは、『坊っちゃん』が「学校小説」である面に注目

したいのです。

ほぼ全編を、間違いなく愛媛県の旧制松山中学校を舞台にしている『坊っちゃん』。したがって、この学校に乗り込んだ「真っ直ぐな気性」の坊ちゃん先生が躍動します。新米教師の危なっかしい授業場面もあれば、やんちゃな生徒との格闘（生徒指導？）場面も、個性的な先生同士の確執もあります。この時代には珍しい、職場の人間関係の葛藤を描いた小説だとも言えるでしょう。さらに、学校生活に関わる細かい事柄が、かなりな正確さで語られています。

つまり『坊っちゃん』には、明治時代後半期の教師生活や教職の在り方、あるいは学校制度や教育の歴史などに関わる事項が豊富に描かれているわけです。これはもちろん、漱石自身が教員だったからです。正確な記述も、現場感覚をもって教育を論じられるのも当然です。これを見逃す手はありません。

そこで本書では、『坊っちゃん』に登場する学校や先生たちに光を当て、それによって見える事象を、現代の視点から評してみようと考えました。『坊っちゃん』の通信簿、というわけです。ですから、明治時代と現代とを行ったり来たりしながら、私流の語りを展開していくつもりです。

通信簿をつけるということは、明治時代の教育に当てた光の反射光で、現代の教育の実情や問題を映し出すことでもあります。もう少し話を広げれば、明治時代の社会を鑑にして、いまの世

や私自身（皆さんご自身）を顧みることといってもよいのかもしれませんが。通信簿とは、それを書いた人（先生）も、受け取った人（生徒）も、その自らの振る舞いを顧みる契機にすることが目的であるはずですから。

私自身は、三十数年間高校教師として教育の現場に立ってきた経験があります。そして現在は、教職をめざす大学生の授業担当者として、多くの学生たちと交流しています。ということとは、「現代の視点から」とは言っても、「先生からの視点」で語ることになるでしょう。

いっぽう読者の皆さんの多くは、「生徒からの視点」をお持ちだと思います。「企業からの視点」もあるかもしれませんが。でもそれらは、対立するものでも、どちらが正しいというものでもありません。それぞれの立場から、つまりは、学校の内外から語り合うことにつながるわけですね。そのことはきつと、学校や社会の見方も『坊っちゃん』の読み方も、一層深めてくれるのだと信じます。

それでは、『坊っちゃん』が主人公の「おれ」（名前が分からないのですよね）の一人称で語られているように、元教師の「私」という一人称の語りに託して話を進めていきましょう。江戸っ子の坊っちゃんには遠く及びませんが、できる限り軽やかに、ユーモアをもって通信簿づくりに励みたいと思います。読者の皆さんも、ぜひ、その作業に参加していつてください。